20	蒲郡	中部中学校	ヤマモト　ヨシノリ 山本　佳範

分科会番号	3	分科会名	社会科教育（中学校）

研究題目

社会的な見方や考え方を働かせ，仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業
― 中学１年　歴史「どうする長照！？～鵜殿長照が生きた戦国の世～」の実践を通して ―

１　蒲郡市社会科部会の研究題目の捉え方

「社会的な見方や考え方を働かせ，仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」を蒲郡市社会科部会では，以下のように捉えている。

①「**社会的な見方や考え方**」とは，社会的事象を位置や空間的な広がり，時期や時間の経過，事象や人々の相互関係に着目して捉え，比較・分類・統合したり，生活に関連づけたりすることと捉える。
②「**仲間とともに**」とは，学びを通してかかわるすべてのものを仲間と位置づけ，社会的事象を主体的に捉え，学びにかかわるすべての「人」「もの」「こと」に対し，様々な立場や考え方を多面的・多角的に取り込みながら，自らの学びを深める。さらに，問題解決に向けてそれらの考えの共有や合意を経て，問題解決に取り組み続けていく姿と捉える。
③「**よりよい社会づくりへの参画をめざす**」とは，自分にとって身近な社会的事象と出会い，産業や文化を継承し，発展する活動にかかわっていこうとする資質や能力を養っていくことと捉える。

２　主題設定の理由

本学級の生徒たちは，何事も素直に受け止め，前向きに取り組む生徒が多い。１学期に行った『古代の日本人のルーツを探れ！』の単元では，「縄文人は，蒲郡にいたのだろうか」という課題を解決するために，生徒たちは縄文人の生活を根拠に意欲的に考えた。地元の蒲郡と縄文人を関連付けた課題を設定したことで，生徒たちは縄文時代を身近に感じることができた。このような生徒たちの姿から，地域教材の価値の高さを感じた。しかし，自分の考えと根拠となる事実をうまく結びつけることができず，自分の考えに自信がもてない生徒もいた。

歴史学習の意識アンケート結果（図１）では，７割以上の生徒が「歴史学習は好き」と回答したが，「歴史学習は暗記」とも捉えていた。このことから，歴史学習が歴史的な事実を知る・覚えるものにとどまり，自ら課題を追究し，学びを深めていくよさを実感できていない生徒が多いことが分かった。

【図１　歴史学習の意識アンケート結果】

そこで本実践では，生徒たちが歴史を身近に感じ，自ら課題を追究し，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深め，仲間とともに学ぶよさを実感してほしいと願い，研究を進めた。

３　研究の方法

(1) 目指す生徒像

○自ら課題を追究することができる生徒
○歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深めることができる生徒

(2) 研究の仮説

(3) 研究の手だて

Ⅰ―ア　歴史を身近に感じ，興味・関心がもてる地域教材の開発

・地元の戦国武将「鵜殿長照」を教材化（大河ドラマ,小学校時の総合的な学習の時間,地域協働活動などから）

> Ⅰ　生徒たちが**歴史を身近に感じ，興味・関心がもてる地域教材を開発**し，**生徒たちの思いに沿った単元を構想**すれば，自ら課題を追究していくことができるであろう。
>
> Ⅱ　**個人追究の時間を工夫**したり，**仲間とかかわり合う場を設定**したりすれば，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深めることができるであろう。

Ⅰ―イ　生徒たちの思いに沿った単元構想

・生徒たちの思いでつなぐ単元構想

・追究活動を連続的に行う学びの４過程（①出合う→②問いをもつ→③追究する→④深める）

Ⅱ―ア　個人追究の時間の工夫

・舞台劇の映像の視聴，ゲストティーチャーに話を聞く場，史料分析，現地調査など，さまざまな方法での追究活動

Ⅱ―イ　仲間とかかわり合う場の設定

・全体交流や協働学習の場　　・板書の工夫

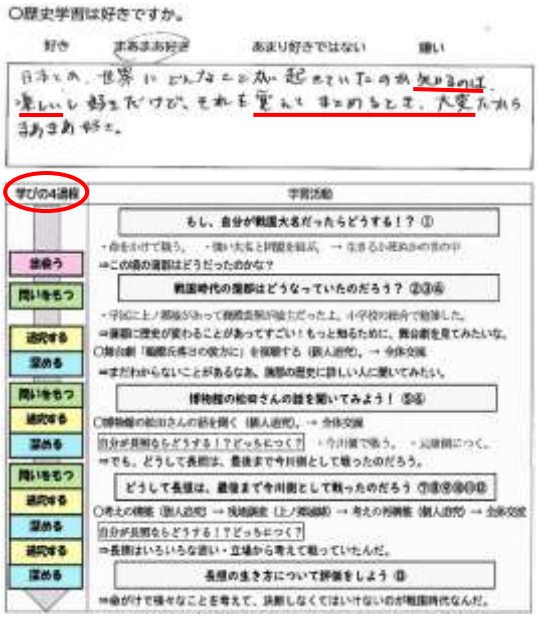
４　実践と考察

(1) 抽出生徒Ａと単元構想（図２）

生徒Ａは，いつも話し手の方を見て，うなずきながら話を聞いて内容を理解しようと真面目に取り組むことができる。しかし，自分の考えを書く際は，なかなか書くことができない場面があった。これは自分の考えと根拠が明確になっていないからと考えた。

歴史学習の意識アンケートで生徒Ａは，「歴史学習はまあまあ好き」と回答し，理由を「知るのは楽しい」「覚えてまとめるとき，大変」と書いた（資料１）。生徒Ａの歴史学習は歴史的事実を知る・覚えるものにとどまり，学習が受け身であることが分かった。そんな生徒Ａが，単元を通して自ら課題を追究し，根拠を明確にして自分の考えと事実を結び付けられる姿を期待した。また，仲間とかかわり合う中で，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深め，仲間とともに学ぶよさを実感してほしいと願った。

【 資料１　生徒Ａの歴史学習の意識アンケート 】



【図２　単元構想図】

(2) 授業実践

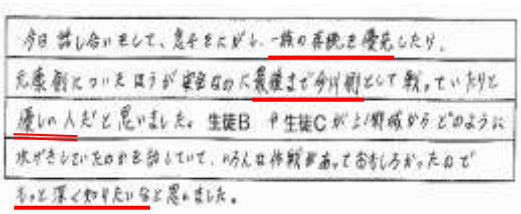
①　戦国時代の蒲郡について追究を始める生徒Ａ（手だてⅠ，Ⅱの検証）

第１時は，「もし，自分が戦国大名だったらどうする？」という課題で話し合いを行った。生徒たちは「自分なら…」と意欲的に発表し，戦国時代の背景を捉えた。その後「戦国時代の蒲郡はどうだったのかな」と問いかけた。大河ドラマを見ている生徒や小学校の時に総合的な学習の時間で鵜殿長照について学習をした生徒，地域協働で行った鵜殿長照の舞台劇に参加した生徒が一

気に発言をした。戦国時代の蒲郡に歴史が変わるような出来事があったことを知った生徒たちは，戦国時代を身近に感じ，興味・関心をもった。生徒Ａも「戦国の蒲郡についてもっと深く知りたい」という思いをもった（資料２）。戦国時代の蒲郡を知るために舞台劇の映像を視聴するとよいという声があがった。そこで次時からは舞台劇の映像から戦国時代の蒲郡について追究することにした。

第２，３時は，初めに舞台劇の台本を配付し，映像の視聴から追究活動を行った。そして，第４時に全体交流を行った。写真１は全体交流時の板書である。上から下に向かって時間の経過を表し，中央に今川氏と関係のある戦い，左右に鵜殿氏・松平氏を分けた。生徒Ａは振り返りで「一族の存続を優先」「最後まで今川側」を根拠に長照は「優しい人」と書いた（資料３）。生徒Ａは全体交流で多くの事実に気付き，板書を基に時代の流れとさまざまな事実を関連付けて長照の人物像を導き出したといえる。また，生徒Ｂ・Ｃの話を聞いて「もっと深く知りたい」と，追究意欲を高めたことが分かる。

【資料３　生徒Ａの振り返り】



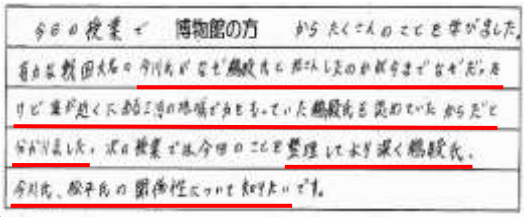
② 追究を広げ，学びを深めようとする生徒Ａ（手だてⅠ―イ，Ⅱの検証）

第５時では，蒲郡の歴史に詳しい博物館の方から話を聞いた（写真２）。

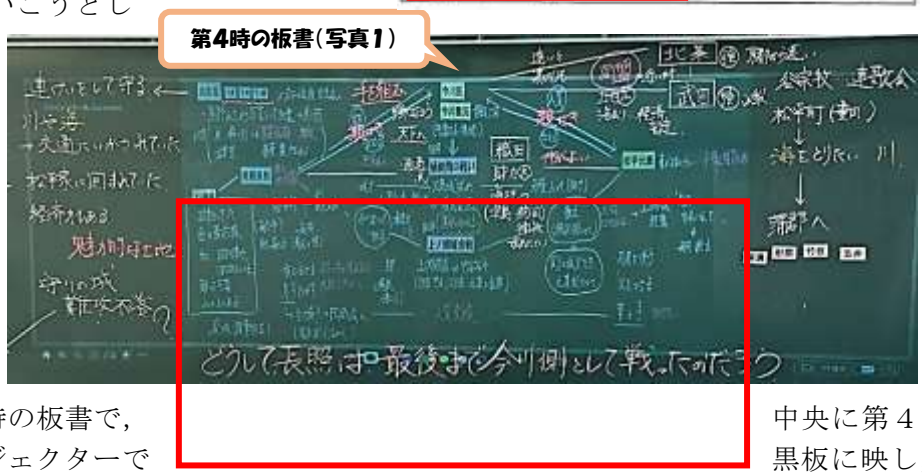
【写真２　博物館の方の話】

生徒Ａは振り返りで「今川氏がなぜ鵜殿氏と結こんしたのかが今までなぞだったけど海が近くにある三河の地域で力をもっていた鵜殿氏を認めていたからだと分かりました」と書いた（資料４）。生徒Ａは，自ら追究してもった問いを博物館の方の話を聞いて，事実を整理しながら自身の問いを解決した。博物館の方と出会う前の生徒Ａは長照本人について考えていたが，博物館の方の話を聞いて今川氏の立場から鵜殿氏（長照）を考えたことが分かるので，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深めているといえる。更に生徒Ａは，「整理してより深く鵜殿氏，今川氏，松平氏の関係性について知りたい」と記述している。歴史的事実を基に，さまざまな人たちに着目して関係性を捉えようと，自らの追究を広げ，学びを深めていこうとしている生徒Ａの姿といえるので，追究意欲は持続しているといえる。

【資料４　生徒Ａの振り返り】



第６時は，博物館の方の話を整理し，今後の追究や学びを広げていけるように全体交流をした。その様子を舞台劇実行委員の方に見てもらった。写真３は第６時の板書で，中央に第４時の板書（写真１）をプロジェクターで黒板に映し，追記していく形で板書をした。視覚的にどこが，どのくらい追究や学びが広がったか捉えやすいものとなった。その後「自分が長照ならどうする！？どっちにつく？」と発問した。すると，学級の中の３人が今川側で，後の全ての生徒は松平側だった。この結果から『どうして長照は，最後まで今川側として戦ったのだろ



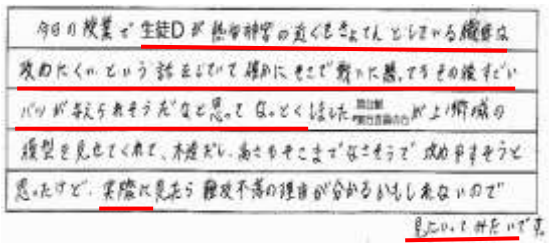
【写真３　板書の

【写真４　舞台劇実行委員の方の話】

う』という問いが教室中に広がり，これを共通課題として次時から追究することにした。授業の最後に舞台劇実行委員の方から上ノ郷城について話をしていただいた（写真４）。

生徒Ａは振り返りで「生徒Ｄが熱田神宮の近くをきょてんとしている織田は攻めにくいという話をしていて確かにそこで戦いに勝ってもその後すごいバツが与えられそうだなと思ってなっとく」と記述した（資料５）。全体交流で生徒Ａは，生徒Ｄの考えを聞いて，織田や元康のそれぞれの立場，関係性から状況を考えられたので，板書を学びの支えに歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深めたといえる。そして生徒Ａは「実際に…見にいってみたい」とも書き，舞台劇実行委員の方から上ノ郷城の話を聞いた生徒Ａは，机上の学習にとどまらず，現地調査をして自ら自身の追究や学びを深めようとしていることが分かる。ここから生徒Ａの追究意欲は更に高まっているといえる。

【資料５　生徒Ａの振り返り】

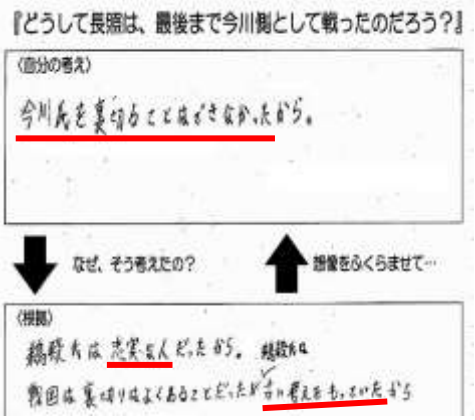

今日の授業で生徒Dが熱田神宮の近くをきょてんとしている織田は攻めにくいという話をしていて確かにそこで戦いに勝ってもその後すごいバツが与えられそうだなと思ってなっとくしました。岡山県 東京都 吉備高原の上ノ郷城の模型を見せてくれて、木造だし、あまりそこまでなさそうで成功しそうと思ったけど、実際に見たら難攻不落の理由が分かるかもしれないので見たいと思いました。

③　歴史を肌で感じ，自分の考えを構築する生徒Ａ（手だてⅠ―イ，Ⅱ―アの検証）

生徒Ａのように生徒たちは，上ノ郷城跡に行って現地調査をしたいという思いで溢れていたので，実際に上ノ郷城跡に行くことにした。そのときに解説してくれる人がいるとありがたいということになり，代表生徒自ら博物館の方に連絡をとった。生徒自ら連絡をして博物館の方から快諾をもらったことで，生徒たちの追究意欲は一気に高まった。

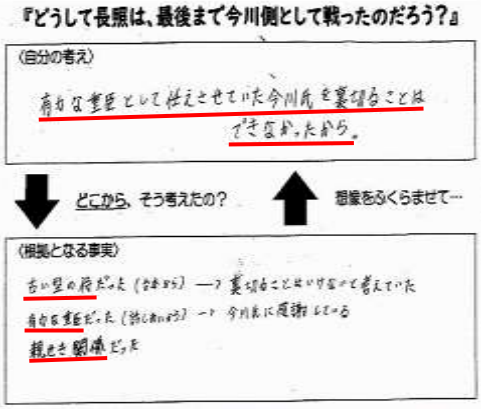
見学時の視点をもつために第７時は，史料を配付して個人追究の時間を設けた。生徒Ａは「今川氏を裏切ることはできなかった」と自分の考えをすぐにもったが，根拠となる事実が「忠実な人」「古い考えをもっていた」と抽象的だった（資料６）。これまでさまざまな方法で追究活動を重ね，事実が多くになったことで，生徒Ａはそこから自分の考えに合った根拠となる事実を選択・判断することができなかった。そこで，まだ自分の考えと根拠を明確に結びつけるのに時間が必要と感じたので，第８時も個人追究の時間を設定した。

【資料６　生徒Ａのワークシート】


『どうして長照は、最後まで今川側として戦ったのだろう？』
〈自分の考え〉
今川氏を裏切ることはできなかったから。
なぜ、そう考えたの？
想像をふくらませて…
〈根拠〉
義元は忠実な人だったから。
戦国は裏切りはよくあることだったが古い考えをもっていたから

資料７は，第８時の個人追究後の生徒Ａのワークシートである。生徒Ａは「有力な重臣として仕えさせていた」を追記して「今川氏を裏切ることはできなかった」と自分の考えを書いた。これまでさまざまな立場から関係性を考えてきた生徒Ａは，長照とって今川氏が１番大きな存在で最後まで仕えることが重責と判断して義務感の強い考えをもった。根拠となる事実も「古い型の侍」「有力な重臣」「親せき関係」など，いくつかの歴史的事実から自分の考えと結び付けることができたことが分かる。さまざまな方法で追究し，追究時間を十分に確保したことで，生徒Ａはじっくり課題と向き合い，根拠を明確にして自分の考えを構築することができたといえる。

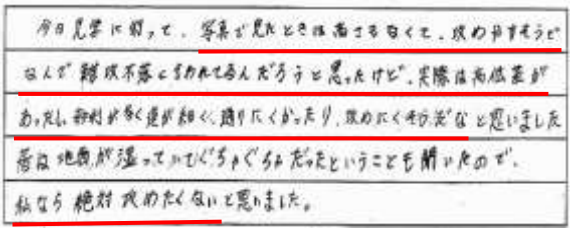
【資料７　生徒Ａのワークシート】


『どうして長照は、最後まで今川側として戦ったのだろう？』
〈自分の考え〉
有力な重臣として仕えさせていた今川氏を裏切ることはできなかったから。
どこから、そう考えたの？
想像をふくらませて…
〈根拠となる事実〉
古い型の侍だった（なぜなら）→裏切ることはいけないと考えていた
有力な重臣だった（なぜなら）→今川氏に恩義はあるから
親せき関係だった

第９時に博物館の方と現地調査に行った（写真５）。生徒Ａは振り返りで「写真で見たときは高さもなくて，攻めやすそう…実際は高低差があったし，砂利が多く道が細く通りにくかったり攻めにくそうだな」と書いた（資料８）。現地調査で博物館の方に解説してもらいながら地理的な空間や土地，立地などを肌で感じた生徒Ａは，机上の学習では気付くことのできないことに気付き，更に自身の追究や学びを深めた。また「私なら攻めたくない」とも記述し，生徒Ａは自分事として考えたことが分かる。歴史を肌で感じることのできる現地調査を取り入れたことは，歴史をより身近に感じるのに有効だったといえる。

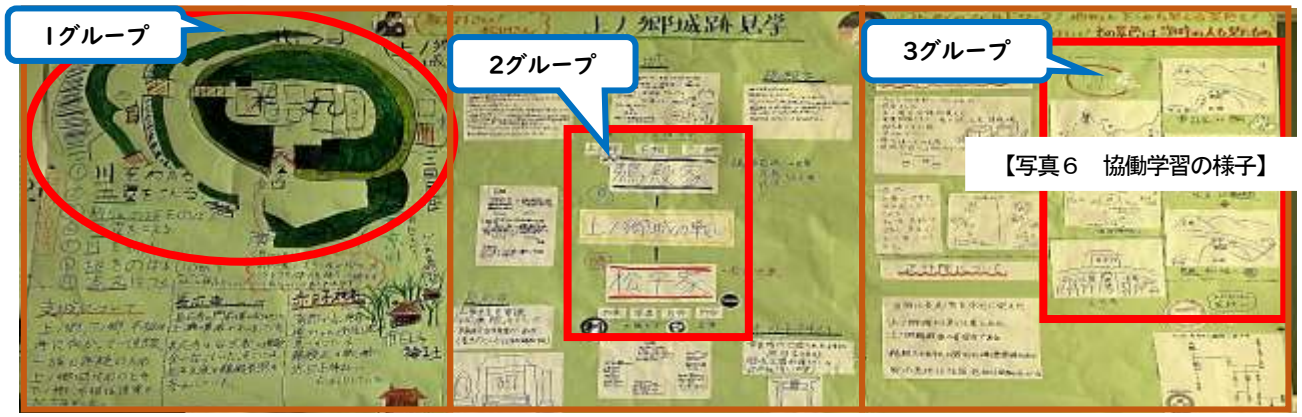
【写真５　現地調査の様子】

【資料８　生徒Ａの振り返り】


今日見学に行って，写真で見たときは高さもなくて，攻めやすそうだなんて難攻不落と言われてるんだろうと思ったけど，実際は高低差があったし，砂利が多く道が細く通りにくかったり，攻めにくそうだなと思いました。昔は地震が強くてかなりぐちゃぐちゃだったということも聞いたので，私なら絶対攻めたくないと思いました。

【資料９　グループごとにまとめた模造紙】

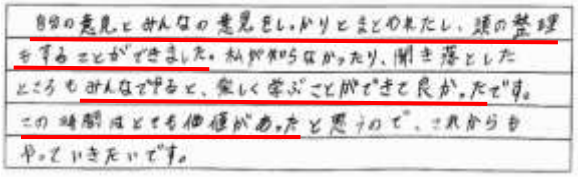
④　学びを整理し，仲間とともに学ぶよさを実感する生徒Ａ（手だてⅠ―イ，Ⅱ―イの検証）



【写真６　協働学習の様子】

第 10 時は，現地調査で学んだことをグループで模造紙にまとめる協働学習の場を設けた（写真６）。生徒たちの会話は活発で，主体的に学習が進んだ。１グループは図を使って上ノ郷城の難攻不落の様子を表し，２グループは鵜殿家と松平家の立場に分けて上ノ郷城合戦に関係する事実をまとめ，３グループは絵で上ノ郷城合戦の流れを表した（次頁:資料９）。同じ場所で現地調査を行ったのにも関わらず，まとめ方に違いが出たのは，これまで生徒たちが歴史的な見方・考え方を働かせながら追究し，学びを深めてきたから重要となる事実を自ら選択・判断することができたといえる。

【資料 10　生徒Ａのワークシート】


自分の意見とみんなの意見をしっかりとまとめられたし，頭の整理をすることができました。私がわからなかったり，聞き落としたところもみんなでやると，楽しく学ぶことができて良かったです。この時間はとても価値があったと思うので，これからもやっていきたいです。

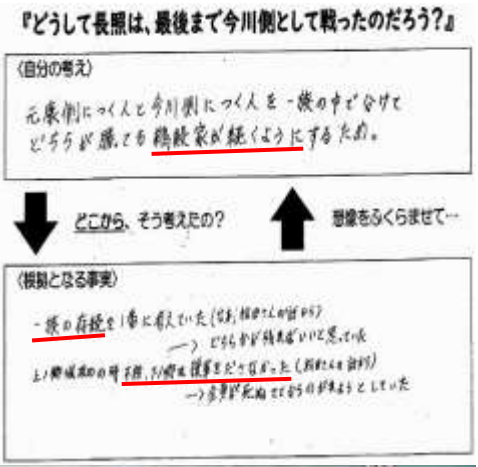
生徒Ａは振り返りで「自分とみんなの意見をしっかりとまとめられたし，頭の整理もすることができました」と書いた（資料 10）。協働学習を取り入れたことで，仲間と歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを整理して深めたことに達成感を味わったことが分かる。また生徒Ａは「みんなでやると，楽しく学ぶことができて良かった」「この時間はとても価値があった」と記述し，仲間とともに学ぶよさを実感し，自ら学びを価値付けることができたことが分か

る。協働学習を取り入れたことは，仲間同士で歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深め，仲間とともに学ぶよさを実感するのに有効だったといえる。

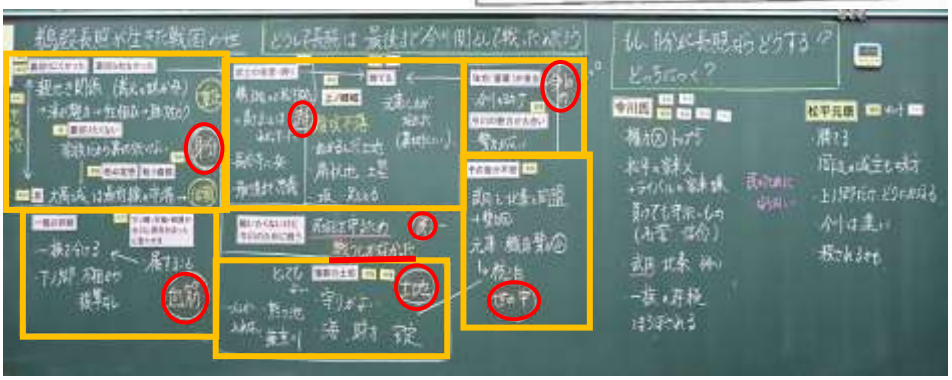
⑤　自分の考えを再構築し，学びを深める生徒Ａ（手だてⅠ―イ，Ⅱの検証）

第 11 時は，自分の考えを再構築する個人追究の時間を設けた。生徒Ａは新たに「鵜殿家が続くように」と考えをもった（資料 11）。現地調査に行く前の生徒Ａは，今川氏の重臣として長照自身の義務感の強さを考えとしていたが，現地調査で歴史を肌で感じ，博物館の方の解説を聞く中で，長照は鵜殿家全体の今後を思って今川側として戦うことを決断したと考えた。同じ長照のことでも，生徒Ａは視点を変えて考えることができたことが分かる。また，根拠となる事実は「一族の存続」「不相，下ノ郷は援軍ださなかった」と，立場の違う鵜殿家（不相，下ノ郷）の動きや関係性から考えている。この姿から，生徒Ａは歴史的な見方・考え方を働かせながら根拠を明確にして新たに自分の考えをもったといえるので，考えを再構築する個人追究の時間は有効だったといえる。

【資料 11　生徒Ａのワークシート】



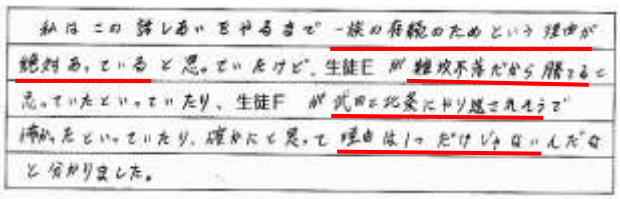
第 12 時で，共通課題に迫るために全体交流を行った。板書（写真７）は，生徒たちの考えを基に長照の思いを分類して書いた。生徒たちは積極的に考えを発表し，自分の考えを伝えることが苦手な生徒Ａも自ら発言した。これは個人追究時に自分の考えと根拠を明確にすることができたので，自信をもって自ら発言することができたといえる。授業終盤に第６時でも聞いた「自分が長照ならどうする！？どっちにつく？」と発問した。第６時では学級の３人が今川側で，他の全ての生徒は松平側だったが，この時は半数以上が今川側にした。これは，さまざまな事実を基に歴史的な見方・考え方を働かせながら長照の思いに深く迫った変化で，深い追究と学びを表す生徒たちの姿といえる。



【写真７　板書の様子】

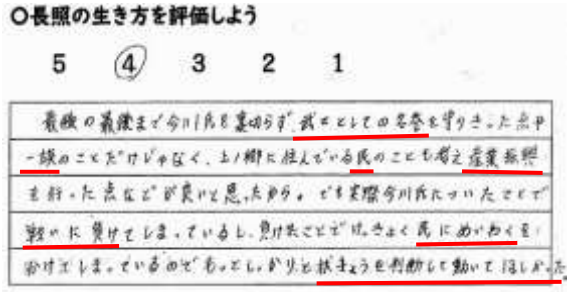
生徒Ａは振り返りで「一族の存続のためという理由が絶対あっている」と書き，自分の考えに自信をもっていた（資料 12）。しかし，生徒Ｅの「難攻不落だから勝てる」や生徒Ｆ「武田と北条にやり返されそう」などの考えを聞いて「理由は１つだけじゃない」と長照のさまざまな思いや状況に気付いた。生徒たちの多く考えを整理し，長照の思いや状況に分けた板書をしたことで，生徒Ａは仲間の考えを比較・関連させながら長照のさまざまな思いや状況に気付くことができたといえるので，板書は生徒たちの学びの支えになったことが分かる。単元を通して，連続的に行う学びの４過程を取り入れ，さまざまな方法で追究してきたことで，生徒たちからは多様な考えが生まれた。そして仲間とのかかわり合いを通して，さまざまな視点・立場から意見交流ができたことで，生徒Ａのように新たな考えに気付き，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深めた生徒たちの姿があった。

【資料 12　生徒Ａの振り返り】



【資料 13　生徒Ａの長照の生き方の評価】

第 13 時では，長照の生き方を５段階で評価した（資料 13)。生徒Ａは評価を４にした。「武士の名誉」「一族」「民」「産業振興」とさまざまな視点・立場から長照の生き方はよかったと評価をしたが，「戦いに負け」「民に迷惑」「状況を判断して動いてほしかった」と評価を５にしなかった理由を書き，戦国の背景や様々な立場・視点を基に評価することができていることが分かる。これは単元を通して，自ら課題を追究し続け，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深めた姿といえる。

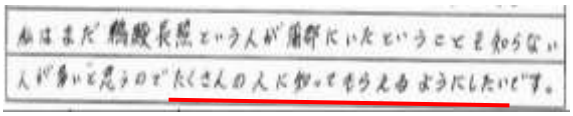

○長照の生き方を評価しよう

5　④　3　2　1

義弟の義豊まで今川氏を裏切らず武士としての名誉を守りきった点や一族のことだけじゃなく、土ノ郷に住んでいる民のことも考え産業振興を行った点などが良いと思ったから。でも実際今川氏についたことで戦いに負けてしまっているし、負け戦ことで民にめいわくをかけてしまっているのでもっとしっかりと状況を判断して動いてほしかった

【資料 14　生徒Ａの振り返り】

単元後の振り返りで生徒Ａは「たくさんの人に知ってもらえるようにしたい」と記述した（資料 14)。地域教材を開発し，単元を通して多くの地域の人と出会ったり，現地調査をしたりする中で，生徒Ａは地域の一員として自分の学びを社会にも広げたいという思いをもった。


私はまだ鵜殿長照という人が浜松にいたということを知らない人が多いと思うのでたくさんの人に知ってもらえるようにしたいです。

５　研究の成果と課題

(1) 仮説Ⅰについて

地元の戦国武将「鵜殿長照」を教材化したことで，生徒たちは歴史を身近に感じ，興味・関心をもって自ら課題を追究することができた。また，生徒たちの思いでつなぐ単元を構想し，追究活動を連続的に行う学びの４過程を単元に取り入れたことで，自ら課題を追究し続けることができた。このことから，歴史を身近に感じ，興味・関心がもてる地域教材の開発や生徒たちの思いに沿った単元構想は，自ら課題を追究していくのに有効だったといえる。

(2) 仮説Ⅱについて

さまざまな方法で追究活動をし，個人追究の時間を十分に確保したことで，生徒たちは歴史的な見方･考え方を働かせながら自分の考えと根拠となる事実を結び付けて，考えを構築することができた。また，全体交流や協働学習など仲間とかかわり合う場を設け，板書を工夫したことで，生徒たちは自身の学びを整理し，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深め，仲間とともに学ぶよさを実感することができた。このことから，個人追究の時間の工夫や仲間とかかわり合う場の設定は，歴史的な見方・考え方を働かせながら学びを深めるのに有効だったといえる。

本研究で協働学習を取り入れた際，生徒たちはいきいきと主体的に追究活動を行い，学びを深めた。今後はペア・グループなど，生徒同士のかかわり合いを増やした実践を積んでいきたい。